神鷺之巻

泉鏡花

一

白鷺明神（しらさぎみょうじん）の祠（ほこら）へ——一緑の森をその峰に仰いで、小県銑吉（おがたせんきち）がいざ詣でようとすると、案内に立ちそうな村の爺さんが少なからず難色を顕（あら）わした。

この爺さんは、

「——おらが口で、更（あら）めていうではねえがなす、内の媼（ばばあ）は、へい一通りならねえ巫女（いちこ）でがすで。」……

若い時は、渡り仲間の、のらもので、猟夫（かりゅうど）を片手間に、小賭博（こばくち）なども遣（や）るらしいが、そんな事より、古女房が巫女というので、聞くものに一種の威力があった

のはいうまでもない。

またその媼巫女(うばいちこ)の、巫術(ふじゅつ)の修煉(しゅうれん)の一通りのものでない事は、読者にも、間もなく知れよう。

一体、孫八が名だそうだ、この爺さんは、つい今しがた、この奥州、関屋の在、旧――街道わきの古寺、西明寺(さいみょうじ)の、見る影もなく荒涼(あれすさ)んだ乱塔場で偶然知己(ちかづき)になったので。それから――無住ではない、住職の和尚は、斎稼(ときかせ)ぎに出て留守だった――その寺へ伴われ、庫裡(くり)から、ここに准胝観世音(じゅんでいかんぜおん)の御堂(みどう)に詣でた。

いま、その御厨子(みずし)の前に、わずかに二三畳の破畳(やれだたみ)の上に居るのである。

さながら野晒（のざらし）の肋骨（あばらぼね）を組合わせたように、曝（さ）れ古びた、正面の閉した格子を透いて、向う峰の明神の森は小さな堂の屋根を包んで、街道を中に、石段は高いが、あたかも、ついそこに掛けた、一面墨絵の額、いや、ざっと彩った絵馬のごとく望まるる。

明神は女体におわす——爺さんがいうのであるが——それへ、詣ずるのは、石段の上の拝殿までだが、そこへ行（ゆ）くだけでさえ、清浄（しょうじょう）と斎戒（さいかい）がなければならぬ。奥の大巌（おおいわ）の中腹に、祠が立って、恭（うやうや）しく斎（いつ）き祭った神像は、大深秘で、軽々しく拝まれない——だから、参った処で、その効（かい）はあるまい……と行（ゆ）くのを留めた

そうな口吻（くちぶり）であった。

「ごく内々の事でがすがなす、明神様のお姿というのはなす。」

時に、勿体ないが、大破落壁した、この御堂の壇に、観音の緑髪、朱唇（しゅしん）、白衣（びゃくえ）、白木彫（しらきぼり）の、み姿の、片扉金具の抜けて、自（おのず）から開いた廚子から拝されて、誰（た）が捧げたか、花瓶の雪の卯の花が、そのまま、御袖（みそで）、裳（もすそ）に紛（まが）いつつ、銑吉が参らせた蠟燭（ろうそく）の灯に、格天井（ごうてんじょう）を漏る昼の月影のごとく、ちらちらと薄青く、また金色（こんじき）の影がさす。

「なす、この観音様に、よう似てござらっしゃる、と

の事でなす。」……

ただこの観世音の麗相を、やや細面にして、玉の皓（しろ）きがごとく、そして御髪（みぐし）が黒く、やっぱり唇は一点の紅である。

その明神は、白鷺の月冠をめしている。白衣で、袴（はかま）は、白とも、緋（ひ）ともいうが、夜の花の朧（おぼろ）と思え。……どの道、巌（いわお）の奥殿の扉を開くわけには行かないのだから、偏（ひとえ）に観世音を念じて、彼処（かしこ）の面影を偲（しの）べばよかろう。

爺さんは、とかく、手に取れそうな、峰の堂――絵馬の裡（なか）へ、銃吉を上らせまいとするのである。

第一可恐（おそろし）いのは、明神の拝殿の蔀（しとみ）うち、すぐの承塵（なげし）に、いつの昔に奉納したのか薙刀（なぎなた）が一振（ひとふり）かかっている。勿論誰も手を触れず、いつ研いだ事もないのに、切味（きれあじ）の鋭さは、月の影に翔込（かけこ）む梟（ふくろう）、小春日になく山鳩は構いない。いたずらものの野鼠は真二つになって落ち、ぬたくる蛇は寸断（ずたずた）になって蠢（うごめ）くほどで、虫、獣（けだもの）も、今は恐れて、床、天井を損わない。

人間なりとて、心柄によっては無事では済まない。かねて禁断であるものを、色に盲（めし）いて血気な徒が、分別を取はずし、夜中、御堂へ、村の娘を連込んだものがあった。隔ての帳（とばり）も、簾（すだれ）もないのに——

――それが、何と、明い(あかる)月夜よ。明神様もけなりがッつろと、二十三夜の月待の夜話(よばなし)に、森へ下弦の月がかかるのを見て饒舌(しゃべ)った。不埒(ふらち)を働いてから十五年。四十を越えて、それまでは内々恐れて、黙っていたのだが、――祟(たた)るものか、この通り、と鼻をさして、何の罰が当るかい。――舌も引かぬに、天井から、青い光がさし、その百姓屋の壁を抜いて、散りかかる柳の刃がキラリと座のものの目に輝いた時、色男の顔から血しぶきが立って、そぎ落された低い鼻が、守宮(やもり)のように、畳でピチピチと刎(は)ねた事さえある。

いま現に、町や村で、ふなあ、ふなあ、と鼻くたで、

因果と、鮒鰌（ふなどじょう）を売っている、老ぼれがそれである。村若衆（わかいしゅ）の堂の出合は、ありそうな事だけれど、こんな話はどこかに類がないでもなかろう。

しかし、なお押重ねて、爺さんが言った、……次の事実は、少からず銑吉を驚かして、胸さきをヒヤリとさせた。

余り里近なせいであろう。近頃では場所が移った。が、以前は、あの明神の森が、すぐ、いつも雪の降ったような白鷺の巣であった。近く大正の末である。一夜に二件、人間二人、もの凄（すご）い異状が起った。

その一人は、近国の門閥家（もんばつか）で、地方的に名望権威が

あって、我が儘(まま)の出来る旦那(だんな)方。人に、鳥博士と称(とな)えられる、聞こえた鳥類の研究家で。家には、鳥屋というより、小さな博物館ぐらいの標本を備えもし、飼ってもいる。近県近郷の学校の教師、無論学生たち、志あるものは、都会、遠国からも見学に来(きた)り訪(と)うこと、須賀川の牡丹(ぼたん)の観賞に相斉(あいひと)しい。で、いずれの方面からも許されて、その旦那の紳士ばかりは、猟期、禁制の、時と、場所を問わず、学問のためとして、任意に、得意の猟銃の打金をカチンと打ち、生きた的に向って、ピタリと照準する事が出来る。

時に、その年は、獲ものでなしに、巣の白鷺の産卵

と、生育状態の実験を思立たれたという。……雛(ひよ)ッ子はどんなだろう。鶏や、雀と違って、ただ聞いても、鴛鴦(おしどり)だの、白鷺のあかんぼには、博物にほとんど無関心な銑吉も、聞きつつ、早くまず耳を傾けた。

在所には、旦那方の泊るような旅館がない。片原の町へ宿を取って、鳥博士は、夏から秋へかけて、その時々。足繁くなると、ほとんど毎日のように、明神の森へ通ったが、思う壺の巣が見出せない。

——村に猟夫(かりゅうど)が居る。猟夫(りょうし)といっても、南部の猪(いのしし)や、信州の熊に対するような、本職の、またぎ、おやじの雄(おす)ではない。のらくらものの隙稼(ひまかせ)ぎに鑑札だ

けは受けているのが、いよいよ獲ものに困（こう）ずると、極めて内証に、森の白鷺を盗み撃（うち）する。人目を憚（はばか）るのだから、忍びに忍んで潜入するのだが、いや、どうも、我折（がお）れた根気のいい事は、朝早くでも、晩方でも、日が暮れたりといえどもで、夏の末のある夜（よ）などは、まよ宿鳥（ねどり）なりと、占めようと、右の猟夫（りょうし）が夜中真暗（まっくら）な森を徜徉（さまよ）ううちに、青白い光りものが、目一つの山の神のように動いて来るのに出撞（でっくわ）した。けだし光は旦那方の持つ懐中電燈であった。が、その時の鳥旦那の装（よそおい）は、杉の葉を、頭や、腰のまわりに結びつけた、面（つら）まで青い、森の悪魔のように見えて、猟夫を息を引

いて驚倒せしめた。旦那の智恵によると、鳥に近づくには、季節によって、樹木と同化するのと、また鳥とほぼ服装の彩（いろどり）を同じゅうするのが妙術だという。
それだから一夜に事の起った時は、冬で雪が降っていたために、鳥博士は、帽子も、服も、靴まで真白（まっしろ）にしていた、と話すのであった。

（……?……）

ところで、鳥博士も、猟夫（りょうし）も、相互の仕事が、両方とも邪魔にはなるが、幾度（いくたび）も顔を合わせるから、逢えば自然と口を利く。「ここのおつかい姫は、何だな、馬鹿に恥かしがり屋で居るんだな。なかなか産む処を見

せないが。」「旦那、とんでもねえ罰が当る。」「撃つやつとどうかな。」段々秋が深くなると、「これまでのは渡りものの、やす女だ、侍女も上等のになると、段々勿体をつけて奥の方へ引込むな。」従って森の奥になる。「今度見つけた巣は一番上等だ。鷺の中でも貴婦人となると、産は雪の中らしい。人目を忍ぶんだな。産屋も奥御殿という処だ。」「やれ、罰が当るてば。旦那。」「撃つやつとどうかな。」——雪の中に産育する、そんな鷺があるかどうかは知らない。爺さんの話のまま——猟夫がこの爺さんである事は言うまでもなかろうと思う。さて猟夫が、雪の降頻る中を、朝の間に森へ行

くと、幹と根と一面の白い上に、既に縦横に靴で踏込んだあとがあった。――畜生、こんなに疾(はや)くから旦那が来ている。博士の、静粛な白銀(しろがね)の林の中なる白鷺の貴婦人の臨月の観察に、ズトン！ は大禁物であるから、睨(にら)まれては事こわしだ。一旦破寺(いったんやれでら)――西明寺はその一頃は無住であった――その庫裡(くり)に引取って、炉に焚火(たきび)をして、弁当を使ったあとで、出直して、降積った雪の森に襲い入ると、段々に奥深く、やがて向うに青い水が顕(あら)われた、土地で、大沼というのである。

今はよく晴れて、沼を囲んだ、樹の袖、樹の裾(すそ)が、大(おおい)なる紺青(こんじょう)の姿見を抱(いだ)いて、化粧するようにも見え、

立囲った幾千の白い上臈（じょうろう）が、瑠璃（るり）の皎殿（こうでん）を繞（めぐ）り、碧橋（へききょう）を渡って、風に舞うようにも視（なが）められた。

この時、煩悩（ぼんのう）も、菩提（ぼだい）もない。ちょうど汀（なぎさ）の銀の蘆（あし）を、一むら肩でさらりと分けて、雪に紛（まが）う鷺が一羽、人を払う言伝（ことづて）がありそうに、すらりと立って歩む出端（でばな）を、ああ、ああ、ああ、こんな日に限って、ふと仰がるる、那須嶽連山の嶺（みね）に、たちまち一朶（いちだ）の黒雲の湧（わ）いたのも気にしないで、折敷（おりしき）にカンと打った。キャッ！と若い女の声。魂（たま）ぎる声。

這（は）ったか、飛んだか、辷（すべ）ったか。猟夫（りょうし）が目くるめいて駆付けると、凍（い）てざまの白雪に、ぽた、ぽた、ぽた

と紅（あけ）が染まって、どこを撃ったか、黒髪の乱れた、うつくしい女が、仰向（あおむ）けに倒れ、もがいた手足をそのままに乱れ敷いていたのである。

いやが上の恐怖と驚駭（きょうがい）は、わずかに四五間離れた処に、鳥の旦那が真白（まっしろ）なヘルメット帽、警官の白い夏服で、腹這（はらばい）になっている。「お助けだ——旦那、薬はねえか。」と自分が救われたそうに手を合せた。が、鳥旦那は——鷺が若い女になる——そんな魔法は、俺が使ったぞ、というように知らん顔して、遠めがねを、それも白布で巻いたので、熟（じっ）とどこかの樹を枝を凝視（みつ）めていて、ものも言わない。

猟夫は最期（いまわ）と覚悟をした。……

そこで、急いで我が屋へ帰って、不断、常住、無益な殺生を、するな、なせそと戒める、古女房の老巫女（いちこ）に、しおしおと、青くなって次第を話して、……その筋へなのって出るのに、すぐに梁（はり）へ掛けたそうに褌（ふんどし）をしめなおすと、梓（あずさ）の弓を看板に掛けて家業にはしないで、茅屋（あばらや）に隠れてはいるが、うらないも祈禱（きとう）も、その道の博士だ――と言う。どういうものか、正式に学校から授けない、ものの巧者は、学士を飛越えて博士になる。博士神巫（いちこ）が、亭主が人殺しをして、唇の色まで変って震えているものを、そんな事ぐらいで留（や）め

はしない……冬の日の暗い納戸で、糸車をじい……じい……村も浮世も寒さに喘息（ぜんそく）を病んだように響かせながら、猟夫に真裸（まっぱだか）になれ、と歯茎を緊（し）めて厳（おごそか）に言った。経帷子（きょうかたびら）にでも着換えるのか、そんな用意はねえすべい。……井戸川で凍死（こごえじに）でもさせる気だろう。しかしその言（ことば）の通りにすると、蓑（みの）を着よ、そのようなその羅紗（らしゃ）の、毛くさい破（やぶれ）帽子などは脱いで、菅笠（すげがさ）を被（かぶ）れという。そんで、へい、苧殻（おがら）か、青竹の杖（つえ）でもつくか、と聞くと、それは、ついてもつかいでも、のう、もう一度、明神様の森へ走って、旦那が傍（そば）に居ようと、居まいと、その若い婦女（おんな）の死骸（しがい）を、蓑の下へ、膚（はだ）づけに

負いまして、また早や急いで帰れ、と少し早めに糸車を廻わしている。

いや、もう、肝魂（きもたま）を消して、さきに死骸の傍を離れる時から、那須颪（なすおろし）が真黒（まっくろ）になって、再び、日の暮方の雪が降出したのが、今度行向う時は、向風の吹雪になった。が、寒さも冷たさも猟夫は覚えぬ。ただ面（つら）を打って巴卍（ともえまんじ）に打ち乱れる紛泪（ふんぱく）の中に、かの薙刀（なぎなた）の刃がギラリと光って、鼻耳をそがれはしまいか。幾度立ちすくみになったやら。……

我が手で、鉄砲でうった女の死骸を、雪を掻（か）いて膚におぶった、そ、その心持というものは、紅蓮（ぐれん）大紅蓮

の土壇(どたん)とも、八寒地獄の磔柱(はりつけばしら)とも、譬(たと)えように口も利けぬ。ただ吹雪に怪飛(けしと)んで、亡者のごとく、ふらふらと内へ戻ると、嫗巫女(うばみこ)は、台所の筵敷(むしろじき)に居敷(いしか)り、出刃庖丁をドギドギと研いでいて、納戸の炉に火が燃えて、破鍋(われなべ)のかかったのが、阿鼻とも焦熱とも凄(すさま)じい。

……「さ、さ、帯を解け、しての、死骸を俎(まないた)の上へ、」

というが、石でも銅(あかがね)でもない。台所の俎で。……嫗(うば)の形相は、絵に描いた安達(あだち)ヶ原と思うのに、頸(くび)には、狼の牙(きば)やら、狐の目やら、鼬(いたち)の足やら、つなぎ合せた長数珠(ながじゅず)に三重(みえ)に捲(ま)きながらの指図でござった。

……不思議というは、青い腰も血の胸も、死骸はすっ

くり俎の上へ納って、首だけが土間へがっくりと垂れる。めったに使ったことのない、大俵の炭をぶちまけたように髻（もとどり）が砕けて、黒髪が散りかかる雪に敷いた。嫗が伸上り、じろりと視（み）て、「天人のような婦（おんな）やな、羽衣を剝（む）け、剝け。」と言う。襟も袖も引き捲（むし）る、と白い優しい肩から脇の下まで仰向（あおむ）けに露（あら）われ、乳へ膝を折上げて、くくられたように、踵（かかと）を空へ屈（かが）めた姿で、柔（やわらか）にすくんでいる。「さ、その白（しら）ッこい、膏（あぶら）ののった双ももを放さっしゃれ。獣（けだもの）は背中に、鳥は腹に肉があるという事いの。腹から割（さ）かっしゃるか、それとも背から解（ひら）くかの、」と何と、ひたわななきに戦（わなな）く、

猟夫の手に庖丁を渡して、「えい、それ。」媼が、女の両脚を餅のように下へ引くとな、腹が、ふわりと動いて胴がしんなりと伸び申したなす。

「観音様の前だ、旦那、許さっせえ。」

御廚子の菩薩（ぼさつ）は、ちらちらと蠟燭の灯に瞬きたまう。

――茫然（ぼうぜん）として、銑吉は聞いていた――

血は、とろとろと流れた、が、氷ったように、大腸小腸（おおわたこわた）、赤肝（あかぎも）、碧胆（あおぎも）、五臓は見る見る解き発（あば）かれ、続いて、首を切れと云う。その、しなりと俎の下へ伸びた皓々（しろじろ）とした咽喉首（のどくび）に、触ると震えそうな細い筋よ、蕨（わらび）、ぜんまいが、山賤（やましず）には口相応、といって、猟夫だとて、若

い時、宿場女郎の、※(まいらせそろ)［＃「参らせ候」のくずし字、65-2］もかしくも見たれど、そんなものがたとえになろうか。……若菜の二葉の青いような脈筋が透いて見えて、庖丁の当てようがござらない。容顔が美麗なで、気後(きおく)れをするげな、この痴気(たわけ)おやじと、媼はニヤリ、「鼻をそげそげ、思切って。ええ、それでのうては、こな爺(じじ)い、人殺しの解死人(げしにん)は免(のが)れぬぞ、」と告(の)り威(おど)す。——命ばかりは欲(ほし)いと思い、ここで我が鼻も薙刀(なぎなた)で引(ひき)そがりよう、恐ろしさ。古手拭(ふるてぬぐい)で、我が鼻を、頸窪(ぼんのくぼ)へ結(ゆわ)えたが、美しい女の冷い鼻をつるりと撮(つま)み、じょきりと庖丁で刎(は)ねると、ああ、あ痛(つつ)、焼火箸(やけひばし)で掌(てのひら)を貫か

れたような、その疼痛（いたさ）に、くらんだ目が、はあ、でんぐり返って気がつけば、鼻のかわりに、細長い鳥の嘴（くちばし）を握っていて、俎の上には、ただ腹を解いた白鷺が一羽。蓑毛も、胸毛も、散りぢりに、血は俎の上と、鷺の首と、おのが掌にたらたらと塗（まみ）れていた。

媼が世帯ぶって、口軽に、「大ごなしが済んだあとは、わしが手でぶつぶつと切っておましょ。鷺の料理は知らぬなれど、清汁（すまし）か、味噌か、焼こうかの。」と榾（ほだ）をほだて、鍋を揺（ゆす）ぶって見せつけて、「人間の娘も、鷺の婦（おんな）も、いのち惜しさにかわりはないぞの。」といわれた時は、俎につくばい、鳥に屈（かが）み、媼に這（は）って、手を

ついた。断つ、断つ、ふッつりと猟を断つ、慰みの無益の殺生は、断つわいやい。

畠（はたけ）二三枚、つい近い、前畷（まえなわて）の夜の雪路（ゆきみち）を、狸が葬式を真似（まね）るように、陰々と火がともれて、人影のざわざわと通り過ぎたのは——真中（まんなか）に戸板を舁（か）いていた。——鳥旦那の、凍えて人事不省（ひとごこちなく）なったのを助け出した、行列であった。

町の病院で、二月以上煩ったが、凍傷のために、足の指二本、鼻の尖（さき）が少々、とれた、そげた、欠けた、はて何といおう、もげたと言おう、もげた。

どうも解（げ）せぬ。さて、合点のゆかない。現におつか

い姫を、鉄砲で撃った猟夫は、肝を潰（つぶ）しただけで、無事に助かった。旦那はまず不具（かたわ）だ。巣を見るばかりで、その祟（たた）りは、と内証（ないしょ）で声をひそめて、老巫女（おいみこ）に伺（うかがい）を立てた。されば、明神様の思召（おぼしめ）しは、鉄砲は避（よ）けもされる。また眷属（けんぞく）が怪我（けが）に打たれまいものではない。——御殿の閨（ねや）を覗（のぞ）かれ、あまつさえ、帳（とばり）の奥のその奥の産屋を——おみずからではあるまいが——お煩（うるさ）い……との事である。

　要するに、御堂の女神は、鉄砲より、研究がおきらいなのである。——

「——万事、その気でござらっしゃれよ。」

「勿論です――」

が、まだその上にも、銑吉を一人で御堂へ行(ゆ)かせるのは、気づかいらしくもあり、好もしくない様子が見えた。すなわち明神の祠(ほこら)へは、孫八爺さんが一所に行こうという。銑吉とても、ただ怯(おど)かしばかりでもなさそうな、秘密と、奇異と、第一、人気のまるでないその祠に、入口に懸(かか)った薙刀(なぎなた)を思うと、掛釘が錆朽(さびく)ちていまいものでもなし、控えの綱など断切れていないと限らない。同行はむしろ便宜であったが。

さて、旧街道を――庫裡(くり)を一廻り、寺の前から――路を埋(うず)めた浅茅(あさじ)を踏んで、横切って、石段下のたらた

ら坂(ざか)を昇りかかった時であった。明神の森とは、山波をつづけて、なだらかに前(もと)来た片原の町はずれへ続く、それを斜(ななめ)に見上げる、山の端(は)高き青芒(あおすすき)、蕨(わらび)の茂った中へ、ちらりと出た……さあ、いくつぐらいだろう、女の子の紅(あか)い帯が、ふと紅(もみ)の袴(はかま)のように見えたのも稀有(けう)であった、が、その下ななめに、草堤(くさどて)を、田螺(たにし)が二つ並んで、日中(ひなか)の畝(あぜ)うつりをしているような人影を見おろすと、

「おん爺(じ)いええ。」

と野へ響く、広く透(とお)った声で呼んだ。

貝の尖(さき)の白髪(しらが)の田螺が、

「おお。」

「爺(じ)ン爺(じ)いよう。」

「……爺ン爺い、とこくわ——おおよ。」

「媼(ば)ン媼(ば)が、なあえ、すぐに帰って、ござれとよう。」

「酒でも餅でもあんめえが、……やぁ。」

「知らねえよう。」

「客人と、やい、明神様詣るだと、言うだあよう。」

「何(あん)でも帰れ、とよう。媼ン媼が言うだがええ。」

なぜか、その女の子、その声に、いや、その言托(ことづけ)をするものに、銑吉さえ一種の威のあるのを感じた。

「そんでは、旦那。」

白髪の田螺は、麦稈帽（むぎわらぼう）の田螺に、ぼつりと分れる。

二

「――何だ、薙刀（なぎなた）というのは、――絵馬の画（え）――これか。」

あの、爺い。口さきで人を薙刀に掛けたな。銑吉は御堂の格子を入って、床の右横の破欄間（やれらんま）にかかった、絵馬を視（み）て、吻（ほっ）と息を吐（つ）きつつ微笑（ほほえ）んだ。

しかし、一口に絵馬とはいうが、入念（じゅねん）の彩色（さいしき）、塗柄の蒔絵（まきえ）に唐草さえある。もっとも年数のほども分らず、

納(おさめ)ぬしの文字などは見分けがつかない。けれども、塗柄を受けた服紗(ふくさ)のようなものは、紗綾(さや)か、緞子(どんす)か、濃い紫をその細工ものに縫込んだ。

武器は武器でも、念流、一刀流などの猛者(もさ)の手を経たものではない。流儀の名の、静(しずか)も優しい、婦人の奉納に違いない。

眉も胸も和(なごやか)になった。が、ここへ来て彳(たたず)むまで、銑吉は実は瞳を据え、唇を緊(し)めて、驚破(すわ)といわばの気構(きがまえ)をしたのである。何より聞怯(ききお)じをした事は、いささかたりとも神慮に背くと、静流(しずかりゅう)がひらめくとともに、鼻を殺(そ)がる、というのである。

これは、生命(いのち)より可恐(おそろし)い。むかし、悪性(あくしょう)の唐瘡(とうがさ)を煩ったものが、厠(かわや)から出て、嚔(くしゃみ)をした拍子に、鼻が飛んで、鉢前をちょろちょろと這った、二十三夜講の、前(さき)の話を思出す。――その鼻の飛んだ時、キャッと叫ぶと、顔の真中(まんなか)へ舌が出て、もげた鼻を追掛(おっか)けたというのである。鳥博士のは凍傷と聞いたが、結果はおなじい。

鼻をそがれて、顔の真中へ舌が出たのでは、二度と東京が見られない。第一汽車に乗せなかろう。

草生(くさおい)の坂を上る時は、日中(ひなか)三時さがり、やや暑さを覚えながら、幾度も単衣(ひとえ)の襟を正した。

銑吉は、寺を出る時、羽織を、観世音の御堂に脱いで、着流しで扇を持った。この形は、さんげ、さんげ、金剛杖（こうごうづえ）で、お山に昇る力もなく、登山靴で、嶽（たけ）を征服するとかいう偉さもない。明神の青葉の砦（とりで）へ、見すぼらしく降参をするに似た。が、謹んでその方が無事でいい。

石段もところどころ崩れ損じた、控綱の欲（ほ）しいほど急ではないが、段の数は、累々と畳まって、半身を、夏の雲に抽（ぬ）いた、と思うほど、聳（そび）えていた。

ここに、思掛けなかったのは――不断ほとんど詣ず

るもののない、無人（むにん）の境だと聞いただけに、蛇類のおそれ、雑草が伸茂って、道を蔽（おお）うていそうだったのが、敷石が一筋、すっと正面の階段まで、常磐樹（ときわぎ）の落葉さえ、五枚六枚数うるばかり、草を靡（なび）かして滑かに通った事であった。

　やがて近づく、御手洗（みたらし）の水は乾いたが、雪の白山（はくさん）の、故郷（ふるさと）の、氏神を念じて、御堂の姫の影を幻に描いた。すぐその御手洗の傍（そば）に、三抱（みかかえ）ほどなる大榎（おおえのき）の枝が茂って、檜皮葺（ひわだぶき）の屋根を、森々（しんしん）と暗いまで緑に包んだ、棟の鰹木（かつおぎ）を見れば、紛（まが）うべくもない女神（じょしん）である。根上りの根の、譬（たと）えば黒い珊瑚礁（さんごしょう）のごとく、堆（うずたか）く築いて、

青く、立浪（たつなみ）を砕くように床の縁下へ蟠（わだかま）ったのが、三間四面の御堂を、組桟敷のごとく、さながら枝の上に支えていて、下蔭はたちまち、ぞくりと寒い、根の空洞（うつろ）に、清水があって、翠珠（すいしゅ）を湛（たた）えて湧（わ）くのが見える。

銑吉はそこで手を浄（きよ）めた。

階段を静（しずか）に——むしろ密（そっ）と上りつつ、ハタと胸を衝（つ）いたのは、途中までは爺さんが一所に来る筈（はず）だった。鍵を、もし、錠（じょう）がささっていれば、扉は開（あ）かない、と思ったのに、格子は押附けてはあるが、合せ目が浮いていた。裡（なか）の薄暗いのは、上の大樹の茂りであろう。及腰（およびごし）ながら差覗（さしのぞ）くと、廻縁（まわりえん）の板戸は、三方とも一二

枚ずつ鎖(とざ)してない。

　手を扉にかけた。裡(うち)の、その真上に、薙刀(なぎなた)がかかっている筈である。

　そこで、銑吉がどんな可笑(おかし)な態(ふう)をしたかは、およそ読者の想像さるる通りである。

「お通しを願います、失礼。」

と云った。

　片扉、とって引くと、床も青く澄んで朗(ほがら)か。

　絵馬を見て、彳(たたず)んで、いま、その心易さに莞爾(にっこり)としたのである。

思いも掛けず、袖を射て、稲妻が飛んだ。桔梗(ききょう)、萩、女郎花(おみなえし)、一幅(いっぷく)の花野が水とともに床に流れ、露を縫った銀糸の照る、彩(いろ)ある女帯が目を打つと同時に、銑吉は宙を飛んで、階段を下へ刎(は)ね落ちた。再び裾(すそ)へ飜(ひるが)えるのは、柄長き薙刀の刃尖(はさき)である。その稲妻が、雨のごとき冷汗を透(とお)して、再び光った。

次の瞬間、銑吉の身は、ほとんど本能的に大榎(おおえのき)の幹を小盾(こだて)に取っていた。

どうも人間より蟬に似ている。堂の屋根うらを飛んで、樹へ遁(に)げたその形が。――そうして、少時(しばらく)して、青い顔の目ばかり樹の幹から出した処は、いよいよ似

ている。
柳の影を素膚（すはだ）に絡（まと）うたのでは、よもあるまい。よく似た模様をすらすらと肩裳（もすそ）へ、腰には、淡紅（とき）の伊達巻ばかり。いまの花野の帯は、黒格子を仄（ほのか）に、端が靡（なび）いて、婦人（おんな）は、頬のかかり頸脚（えりあし）の白く透通る、黒髪のうしろ向きに、ずり落ちた褄（つま）を薄く引き、ほとんど白脛（しらはぎ）に消ゆるに近い薄紅の蹴出（けだ）しを、ただなよなよと捌（さば）きながら、堂の縁の三方を、そのうしろ向きのまま、するすると行（ゆ）き、よろよろと還（かえ）って、往（ゆ）きつ戻りつしている。その取乱した態（ふり）の、あわただしい中（うち）にも、媚（なまめか）しさは、姿の見えかくれる榎の根の荘厳に感じらるる

のさえ、かえって露草の根の糸の、細く、やさしく戦(そよ)ぎ縺(もつ)れるように思わせつつ、堂の縁を往来(ゆきき)した。が、後姿のままで、やがて、片扉開いた格子に、ひたと額をつけて、じっと留まると、華奢(きゃしゃ)な肩で激しく息をした。髪が髢(かもじ)のごとくさらさらと揺れた。その立って、踏みぐくめつつも乱れた裾(すそ)に、細く白々と鳥の羽のような軽い白足袋の爪尖(つまさき)が震えたが、半身を扉に持たせ、半ばを取縋(とりすが)って、柄を高くついた、その薙刀が倒(さかさま)で……刃尖(はさき)が爪先を切ろうとしている。

戦(いくさ)は、銑吉が勝らしい。由来いかなる戦史、軍記にも、薙刀を倒(さかさま)についた方は負である。同時に、その

刃尖が肉を削り、鮮血が踵を染めて伝わりそうで、見る目も危い。
青い蝉が、かなかなのような調子はずれの声を、
「貴女、貴女、誰方にしましても、何事にしましても、危い、それは危い。怪我をします。怪我をします。気をおつけなさらないと。」
髪を分けた頬を白く、手首とともに、一層扉に押当てて、
「あああ」
とやさしい、うら若い、あどけないほどの、うけこたえとまでもない溜息を深くすると、

「小県さん――」
冴(さ)えて、澄み、すこし掠(かす)れた細い声。が、これには銑吉が幹の支えを失って、手をはずして落ちようとした。堂の縁の女でなく、大榎の梢(こずえ)から化鳥(けちょう)が呼んだように聞えたのである。

「……小県さん、ほんとうの小県さんですか。」

この場合、声はまた心持涸(か)れたようだが、やっぱり澄んで、はっきりした。

夏は簾(すだれ)、冬は襖(ふすま)、間(ま)を隔てた、もの越(ごし)は、人を思うには一段、床(ゆか)しく懐しい。……聞覚えた以上であるが、それだけに、思掛けなさも、余りに激しい。――

まだ人間に返り切れぬ。薙刀怯（おび）えの蟬は、少々震声（ふるえごえ）して、

「小県ですよ、ほんとう以上の小県銑吉です、私です。——ここに居ますがね。……築地の、東京の築地の、お誓さん、きみこそ、いや、あなたこそ、ほんとうのお誓さんですか。」

「ええ、誓ですの、誓ですの、誓の身の果（はて）なんですの。」

「あ、危い。」

長刀（なぎなた）は朽縁（くちえん）に倒れた。その刃の平（ひら）に、雪の掌（たなそこ）を置くばかり、たよたよと崩折（くずお）れて、顔に片袖を蔽（おお）うて泣いた。身の果と言う……身の果か。かくては、一城の

姫か、うつくしい腰元の——敗軍には違いない——落人（おちゅうど）となって、辻堂に徜徉（さまよ）った伝説を目（ま）のあたり、見るものの目に、幽窈（ゆうよう）、玄麗（げんれい）の趣があって、娑婆（しゃば）近い事のようには思われぬ。

　話は別にある。今それを言うべき場合でない。築地の料理店梅水の娘分で、店はこの美人のために賑（にぎわ）った。早くから銑吉の恋人である。勿論、その恋を得たのでもなければ、意を通ずるほどの事さえも果さないうちに、昨年の夏、梅水が富士の裾野へ暑中の出店をして、避暑かたがた、お誓がその店を預ったのを知っただけで、この時まで、その消息を知らなかった次第なので

ある。……

その暑中の出店が、日光、軽井沢などだったら、雲のゆききのゆかりもあろう。ここは、関屋を五里六里、山路（やまみち）、野道を分入った僻村（へきそん）であるものを。——実は、銑吉は、これより先き、麓（ふもと）の西明寺の庫裡（くり）の棚では、大木魚の下に敷かれた、女持の提紙入（ハンドバック）を見たし、続いて、准胝観音（じゅんでいかんのん）の御廚子（みずし）の前に、菩薩が求児擁護（ぐうじようご）の結縁（けちえん）に、紅白の腹帯を据えた三方に、置忘れた紫の女扇子（おうぎ）の銀砂子（ぎんすなご）の端（はし）に、「せい」としたのを見て、ぞっとした時さえ、ただ遥（はるか）にその人の面影をしのんだばかりであったのに。

かえって、木魚に圧(お)された提紙入には、美女の古寺の凌辱(りょうじょく)を危(あやぶ)み、三方の女扇子には、妊娠の婦人(おんな)の生死(しょうし)を懸念して、別に爺さんに、うら問いもしたのであったが、爺さんは、耳をそらし、口を避けて、色ある二品(ふたしな)のいわれに触れるのさえ厭(いと)うらしいので、そのまま黙した事実があった。

ただ、あだには見過し難(がた)い、その二品に対する心ゆかしと、帰路(かえり)には必ず立寄るべき心のしるしに、羽織を脱いで、寺にさし置いた事だけを――言い添えよう。

いずれにしても、ここで、そのお誓に逢おうなどとは……譬(たとえ)にこまった……間に合わせに、されば、箱根

で田沢湖を見たようなものである。

三

「――余り不思議です。お誓さん、ほんとのお誓さんなら、顔を見せて下さい、顔を……こっちを向いて、」

ほとんど樹の枝に乗った位置から、おのずと出る声の調子に、小県は自分ながら不気味を感じた。

きれぎれに、

「お恥かしくって、そちらが向けないほどなんですもの。」

泣声だし、唇を含んでかすれたが、まさか恥かしいという顔に異状はあるまい。およそ薙刀を閃めかして薙ぎ伏せようとした当の敵に対して、その身構えが、背後むきになって、堂の縁を、もの狂わしく駆廻ったはおろか、いまだに、振向いても見ないで、胸を、腹部を袖で秘すらしい、というだけでも、この話の運びを辿って、読者も、あらかじめ頷かるるであろう、この婦は姙娠している。

「私が、そこへ行きますが、構いませんか。今度は、こっちで武芸を用いる。高いこの樹の根からだと、すれすれだから欄干が飛べそうだから。」

婦（おんな）は、格子に縋（すが）って、また立った。なおその背後向きのままで居る。

「しかし、その薙刀を何とかして下さらないか。どうも、まことに、危いのですよ。」

「いま、そちらへ参りますよ。」

落ついて静（しずか）にいうのが、遠く、築地の梅水で、お酌ねだりをたしなめるように聞えて、銑吉はひとりで苦笑した。すぐに榎の根を、草へ下りて、おとなしく控え待った。

枝がくれに、ひらひらと伸び縮みする……というと蛇体にきこえる、と悪い。細（ほっそ）りした姿で、薄い色の褄（つま）

を引上げ、腰紐を直し、伊達巻をしめながら、襟を搔合(かきあ)わせ搔合わせするのが、茂りの彼方(かなた)に枝透いて、簾(すだれ)越に薬玉(くすだま)が消えんとする。

やがて、向直って階(きざはし)を下りて来た。引合わせている袖の下が、脇明(わきあけ)を洩(も)れるまで、ふっくりと、やや円い。

牡丹(ぼたん)を抱(いだ)いた白鷺の風情である。

見まい。

「水をのみます。小県さん、私……息が切れる。」

と、すぐその榎の根の湧水(わきみず)に、きように褄を膝に挟んで、うつむけにもならず尋常に二の腕をあらわに

挿入(さしい)れた。榎の葉蔭に、手の青い脈を流れて、すぐ咽喉(のど)へ通りそうに見えたが、掬(く)もうとすると、掌(たなそこ)が薄く、玉の数珠(じゅず)のように、雫(しずく)が切れて皆溢(こぼ)れる。

「両掌(りょうて)でなさい、両掌で……明神様の水でしょう。野郎に見得も何(な)にもいりゃしません。」

「はい、いいえ。」

　膝の上へ、胸をかくして折りかけた袖を圧(おさ)え、やっぱり腹部を蔽(おお)うた、その片手を離さない。

「だって、両掌を突込(つっこ)まないじゃ、いけないいじゃありませんか。」

「ええ、あの柄杓(ひしゃく)があるんですけど。」

「柄杓、」
手水鉢に。
「ああ、手近です。あげましょう。青い苔だけれども
ね、乾いているから安心です、さあ。」
「済みません、小県さん、私知っていましたんですけ
ど、つい、とっちてしまいましたの。」
「ところで……ちょっとお待ちなさい。この水は飲ん
で差支えないんですかね。」
「ええ、冷い、おいしい、私は毎日のように飲んでい
ます。」
それだと毎日この祠へ。

「あ、あ。」

と、消えるように、息を引いて、

「おいしいこと、ああ、おいしい。」

唇も青澄んだように見える。

「うらやましいなあ。飲んだらこっちへ貸して下さい。」

「私が。」

とて、柄を手巾（ハンケチ）で拭（ふ）いたあとを、見入っていた。

「どうしました。」

「髪がこんなですから、毛が落ちているといけませんわ。」

「満々（なみなみ）と下さい。ありがたい、これは冷い。一気には舌が縮みますね。」

とぐっと飲み、

「甘露が五臓へ沁（し）みます。」

と清（すず）しく云った。

小県の顔を、すっと通った鼻筋の、横顔で斜（ななめ）に視（み）ながら、

「まあ、おきれいですこと。」

「水？……勿論！」

「いいえ、あなたが。」

「あなたが。」

「さっき、絵馬を見ていらっしゃいました時もおきれいだと思ったんですが、清水を一息にめしあがる処が、あの……」

「いや、どうも、そりゃちと違いましょう。牛肉のバタ焼の黒煙を立てて、腐った樽柿の息を吹くのと、明神の清水を汲（く）んで、松風を吸ったのでは、それは、いくらか違わなくっては。」

と、はじめて声を出して軽く笑った。

「透通るほどなのは、あなたさ。」

「ええ。」

と無邪気にうけながら、ちょっと眉を顰（ひそ）めた。乳（ち）の

下を且つ蔽(おお)う袖。

「一度、二十許(はたちばか)りの親類の娘を連れて、鬼子母神(きしもじん)へ参詣(さんけい)をした事がありますがね、桐の花が窓へ散る、しんとした御堂(おどう)の燈明で視(み)た、襟脚のよさというものは、拝んで閉じた目も凜(りん)として……白さは白粉(おしろい)以上なんです。――前刻(さっき)も山下のお寺の観世音の前で……お誓さん――女持の薄紫の扇を視ました。ああ、ここへお参りして拝んだ姿は、どんなに美しかろうと思いましたが。」

誓はうつむく。

その襟脚はいうまでもなかろう。

「その人もわかりました。いまおなじ人が、この明神様に籠（こも）ったのもわかったのです。が、お待ちなさいよ。絵馬を、私が視ていた時、お誓さんは、どこに居て……」

「ええ、そして、あの、何をしたんだとおっしゃいましょう。」

つと寄ると、手巾（ハンケチ）を払った手で、柄杓の柄の半ばを取りしめた。その半ばを持ったまま、居処（いどころ）をかえて、小県は、樹の高根に腰を掛けた。

「言いますわ、私……ですが、あなたは、あなたは、どうして、ここへ……」

「おたずね、ごもっともです。――少し気取るようだけれど、ちょっと柄にない松島見物という不了簡（ふりょうけん）を起して……その帰り道なんです。――先祖の墓参りというと殊勝ですが、それなら、行きみちにすべき筈です。関屋まで来ると、ふと、この片原の在所の寺、西明寺ですね。あすこに先祖の墓のある事を、子供のうち、爺さん、祖母（ばあ）さんに聞いていたのを思出しました。勿体ないが、ろくに名も知らない人たちです。

墓は、草に埋（うず）まって皆分りません、一家遠国へ流転のうちに、無縁同然なんですから、寺もまた荒れていますしね。住職も留守で、過去帳も見られないし、そ

の寺へ帰るのを待つ間（ま）に――しかし、そればかりでは
ありません。
――片原の町から寺へ来る途中、田畝畷（たんぼなわて）の道端に、
お中食処（ちゅうじきどころ）の看板が、屋根、廂（ひさし）ぐるみ、朽倒れに潰（つぶ）れ
ていて、清い小流（こながれ）の前に、思いがけない緋牡丹（ひぼたん）が、」
お誓は、おくれ毛を靡（なび）かし、顔を上げる。
「その花の影、水岸に、白鷺が一羽居て、それが、
斑蝥（はんみょう）――人を殺す大毒虫――みちおしえ、というん
ですがね、引啣（ひきくわ）えて、この森の空へ飛んだんです。
まだその以前、その前ですよ。片原まで来る途中、
林の中の道で、途中から、不意に、無理やりに、私の

雇った自動車へ乗込んだ、いやな、不気味な人相、赤い服装、赤いヘルメット帽、赤い法衣（ころも）の男が、男の子四人、同じ赤いシャツを着たのを連れて、猟銃を持ったのがありましてね。勝手な処で、山の下へ、藪（やぶ）へ入って見えなくなったのが——この山続（つづき）のようですから、白鷺の飛んだ方角といい、社（やしろ）のこのあたりか。ずッと奥になると言いますね、大沼か。どっちかで、夢のような話だけれど、神と、魔と、いくさでもはじまりそうな気がしたものですから。」

銑吉は話すうちに、あわれに伏せたお誓の目が、憤（いきどおり）を含んで、屹（きっ）として、それが無念を引きしめて、

一層青味を帯びたのに驚いた——思いしことよ。……

悪魔は、お誓の身にかかわりがないのでない。

「……わけを言います、小県さん、……言いますが、恥かしいのと、口惜(くやし)いのとで、息が詰って、声も出なくなりましたら、こんな、私のような、こんな身体(からだ)に、手をお掛けになるまでもありません。この柄杓の柄を、ただお離しなすって下さい。そのままのめって、人間の青い苔(こけ)……」

「いや、こうして、あなたと半分持った、柄杓の柄は離しません。」

「あの、そのお優しいお心でしたら、きつけの水を下

さいまし……私は、貴方(あなた)を……おきれいだ、と申しましたわね、ねえ。」

「忘れました、そういう串戯(じょうだん)をきいていたくはないのです。」

「いえ、串戯ではないのですが。いま、あの、私は、あの薙刀で、このお腹(なか)を引破って、肝(きも)も臓腑も……」

その水色に花野の帯が、蔀下(しとみした)の敷居に乱れて、お誓の背とともに、むこうに震えているのが見える。榎の梢がざわざわと鳴り、風が颯(さっ)と通った。

「――そこへ、貴方のお姿が、すっと雲からおさがりなすったように……」

「何、私なら落ちたんでしょう。」

「そして、石段の上口(あがりくち)に見えました。まるで誰も来ないのを知って、こちらへ参っているのですし、土地の巧者な、お爺さんに頼みまして、この二三日、来る人も留めてもらうように用意をしていましたんですもの！　思いもよらない、参詣の、それが貴方。格子から熟(じっ)と覗(のぞ)いていますと、この水へ、影もうつりそうな、小県さんなんですもの、貴方なんですもの。」

その爺さんにも逢っている。銑吉は幾度(いくたび)も独りうなずいた。

「こんな、こんな処、奥州の山の上で。」

「御同様です。」

「その拝殿を、一旦むこうの隅へ急いで遁げました。正面に奥の院へ通います階段と石段と。……間は、樹も草も蓬々と茂っています。その階段の下へかくれて、またよく見ました。寸分お違いなさらない、東京の小県さん——おきれいなのがなおあやしい、怪しいどころか可恐いんです。——ばけものが来た、ばけて来た、畜生、また、来た。ばけものだ!……と思ったんです。」

「…………」

「その怪ものに、口惜い、口惜い、口惜い目に逢わされているんですから。……

――畜生――

と声も出ないで。」

「ははあ、たちまち一打(ひとうち)……薙刀ですな。」

「明神様のお持料(もちりょう)です。それでも持ったのが私です、討てる、切れるとは思いませんが――畜生――叩倒(たたきたお)してやろうと思って、」

「切れる分には、まだ、不具(かたわ)です。薙倒されては真二(まっぷた)つです、危い、危い。」

と、いまは笑った。

「堪忍して下さいな、貴方をばけものだと思った私は、浅間(あさま)しい獣(けだもの)です、畜生です、犬です、犬に噛(か)まれた

とお思いになって。」

「馬鹿なことを……飛んでもない、犬に咬（か）まれるくらいなら、私はお誓さんの薙刀に掛けられますよ。かすり疵（きず）も負わないから、太腹（ふとっぱら）らしく太平楽をいうのではないんだが、怒りも怨みもしやしません。気やすく、落着いてお話しなさい。あなたは少しどうかしている、気を沈めて。……これは、ばけものの手触りかも知れませんよ。」

そこで、背（せな）に手を置くのに、みだれ髪が、氷のように冷たく触った。

「どうぞ、あの薙刀の飛ばないように。」

その黒髪は、漆の刃(やいば)のようにヒヤリとする。

水へ辷(すべ)った柄杓が、カンと響いた。

四

「……小県さん、女が、女の不束(ふつつか)で、絶家を起す、家を立てたい——」

「絶家を起す、家を起(た)てたい……」

「ええ、その考えは、間違っていますでしょうか。」

「何が、間違いです。誰が間違いだと云いました。とんでもない、天晴(あっぱ)れじゃありませんか。」

「私の父は、この土地のものなんです。」

「ああ、成程。」

「――この藩のちょっとした藩士だったそうなんですが、道楽ものだったと思います。御維新の騒ぎに刀さしをやめたのは可いんですけれど、そういう人ですから、堅気の商売が出来ないで、まだ――街道が賑かだったそうですから、片原の町はずれへ、茶屋旅籠の店を出したと申しますの。

……貴方、こちらへいらっしゃりがけに――その、あの、牡丹、牡丹ですが。」

なぜか、引くいきに、声がかすれて、

「あの咲いております処は、今は田畝（たんぼ）のようになりましたけれど、もと、はなれの庭だったそうですの……そして――

牡丹は、父の手しおにかけましたものですって。……あとでは、料理ばかりにして、牡丹亭といったそうです。父がなくなりますと……それが人手から人手へ渡って、あとでは立ちぐされも同様。でも、それも、不景気で、こぼし屋の引取手もなしに、暴風雨（あらし）で潰（つぶ）れたのが、家の骸骨（がいこつ）のように路端（みちばた）に倒れていますわ。

母はその牡丹亭ごろの、おかみさん。……そんな事は申しませんでもいいんですけど、父とは、大層若く

て年が違いました。
——町あたりの芸者だそうです。ですが、武家の娘だったせいですか——まだ、私がお腹に。……」
ふと耳許(みみもと)をほんのりと薄く染めた。
「お腹のうち、本所に居る東京の遠縁のものにたよって出まして、のちに、浅草で、また芸者をしたんですけれど、なくなります時、いまわの際まで、血統(ちすじ)が絶える、田沢の家を、田沢の家をと、せめて後を絶(た)やさないように遺言をしたんです。
私はその時分、新橋でお酌に出ておりました。十四や十五の考えで、この上一本になって、人の世話にな

るにした処で、一人で商売をした処で、家を立てるのぞみがありそうに思われません。だもんですから、都合をつけて道をかえまして、梅水へ奉公をしましたのです。自分の口からお恥かしい、余りあからさまのようですが、つむりのものより、なりかたちより、少しでもお金を貯めて、小さな店でも出せますように、その上で、堅気の養子になる人を、縁があったらと、思詰め、念じ切っておりました。

　こんなものでも、一つ家（うち）に、十年の余も辛抱をしますうちには、お一人やお二方、相談をして下さる方のないこともなかったんですけど、田沢の家の養子とで

は、まるでかけ離れました縁ですもの。冷たい顔して、きっぱりと、お断り申しました。それが、心得違いだったんです、間違っていたんです。ねえ。」

「間違いではありません。お誓さん、しかし、ただ、道も一条（ひとすじ）の上だとしたら、家を起す——血統を絶やさない、真に立派な覚悟だけれど、……本当は女一人だとすると、どうしていいか、それは、学者でも、教育家でも、たとえばお寺の坊さんでも、実地に当ると、八衢（やちまた）に前途（ゆくて）が岐（わか）れて、道しるべをする事はむずかしい……世の中になったんですね。」

「まったくですわ。でも、それも、まだ月日は長し…

……昨日（きのう）や今日の事とは思わなかったんですのに――昨年、店の都合で裾野の方へ一夏まいりまして、朝夕、あの、富士山の景色を見ますにつけ……ついのんびりと、一人で旅がしてみたくなったんです。一体出不精な処へ、お蔭様、店も忙しゅうございますし、本所の伯父伯母と云った処で、ほんの母がたよりました寄親（よりおや）同様。これといって行（ゆ）きたい場所も知りませんものですから、旅をするなら、名ばかりでも、聞いただけ懐しい、片原を、と存じまして、十月小春のいい時候に、もみじもさかり、と聞きました。……

　はじめて、泊りました、その土地の町の旅宿（やど）が、ま

わり合せですか、因縁だか、その宿の隠居夫婦が、よく昔の事を知っていました。もの珍らしいからでしょう、宿帳の田沢だけで、もう、ちっとでも片原に縁があるだろう、といいましてね。

　そんなですから、隠居二人で、西明寺の父の墓も案内をしてくれますし。……まことに不思議な、久しく下草の中に消えていた、街道端（ばた）の牡丹が、去年から芽を出して、どうしてでしょう、今年の夏は、花を持った。町でも人が沢山見に行（ゆ）き、下の流れを飲んで酔うといえば、汲（く）んで取って、香水だと賞（ほ）めるのもある。……お嬢さん……私の事です。」

と頬も冷たそうに、うら寂しく、

「故郷へ帰って来て、田沢家を起す、瑞祥（ずいしょう）はこれで分った、と下へも置かないで、それはほんとうに深切に世話をして、牡丹さん、牡丹さん、私の部屋が牡丹の間。餡子（あんこ）ではあんまりだ、黄色い白粉（おしろい）でもつけましょう、牡丹亭きな子です。お一ついかが……そういってどうかすると、お客にお酌をした事もあるんです。長逗留（ながとうりゅう）の退屈ばらし、それには馴（な）れた軽はずみ……」

歎息（ためいき）も弱々と、

「もっとも煩（うるさ）いことでも言えば、その場から、つい

立って、牡丹の間へ帰っていたんです。それというのが、ああも、こうもと、それから、それへ、商売のこと、家(うち)のこと。隠居夫婦と、主人夫婦、家のものばかりも四人でしょう。番頭ですの、女中ですの、入(いり)かわり相談をしてくれます。聞くだけでも楽(たのし)みで、つんだり、崩したり、切組みましたり、庭背戸まで見積って、子供の積木細工で居るうちに、日が経(た)ちます。……鳥居数をくぐり、門松を視(み)ないと、故郷とはいえない、といわれる通りの気になって、おまいりをしましたり。……逗留のうち、幾度、あの牡丹の前へ立ったでしょう。

柱一本、根太板も、親たちの手の触ったのが残っていましょう。あの骨を拾おう。どうしよう。焚こうか、埋めようか。ちょっと九尺二間を建てるにしても、場所がいまの田畝ではどうにもならず。（地蔵様の祠を建てなさい。）隠居たちがいうんです。ああ、いいわねえ、そうしましょうか。

思出しても身体がふるえる、……

今年二月の始でした。……東京も、そうだったたって聞いたんですが、この辺でも珍らしく、雪の少い、暖かな冬でしたの。……今夜の豆撒が済むと、片原で年を取って、あかんぼも二つになると、隠居たちも笑っ

ていました。その晩――暮方……

湯上りのいい心持の処へ、ちらちら降出しました雪が嬉しくって、生意気に、……それだし、銀座辺、あの築地辺の夜ふけの辻で、つまらない悪戯(いたずら)をされました覚えもなし、またいたずらに逢ったところで、ところ久しいだけ、門(かど)なみ知っているんです。……梅水のものですよ。それで大概、挨拶(あいさつ)をして離れちまいますんですもの、道の可恐(こわ)さはちっとも知らずにいたんです。――それに牡丹亭のあとまでは、つれがありましたり、一人でも幾度も行ったり来たり、屋根のない長い廊下もおんなじに思っていましたものですから、コ

オトも着ないで、小県さん、浴衣に襟つき一枚何かで。――裙(すそ)へ流れる水、あの小川も、梅水に居て、座敷の奥で、水調子を聞く音がします。……牡丹はもう、枝ばかり、それも枯れていたんですが、降る雪がすっきりと、白い莟(つぼみ)に積りました。……大輪(おおりん)なのも面影に見えるようです。

向うへ、小さなお地蔵様のお堂を建てたら、お提灯(ちょうちん)に蔦(つた)の紋、養子が出来て、その人のと、二つなら嬉しいだろう。まあ極(きま)りの悪い。……わざとお賽銭箱(さいせんばこ)を置いて、宝珠の玉……違った、それはお稲荷様(いなりさま)、と思っているうちに、こんな風に傘をさして、ちらちらと、

藤の花だか、鷺だかの娘になって、踊ったこともあったっけ。——傘は、ここで、畳んだか、開いてさしたかと、うっかりしました。——傘を、ひどい力で、上へぐいと引いたんです。天にも地にも、小県さん、観音様と、明神様のほかには、女の身体で、口へ出して……」

キリキリと歯を噛んで、つと瞼の色が褪せた。

「癪か。しっかりなさい、お誓さん。」

さそくに掬った柄杓の水を、削るがごとく口に含んで、

「人間がましい、癪なんぞは、通越しているんです。

ああ、この水が、そのまんま、青い煙になって焼いちまってくれればいいのに。」
しばらく、声も途絶えたのである。
「口惜（くや）しいわ、私、小県さん、足が上へ浮く処を、うしろから、もこん、と抱込んだものを、見ました時。」
わなわなと震えたから、小県も肩にかけていた手を離した。倒れそうに腰をつくと、褄（つま）を投げて、片手を苔（こけ）に辷（すべ）らした。
「灰汁（あく）のような毛が一面にかぶさった。枯木のような脊の高い、蒼い顔した※（ひ）々（ひ）［＃「けものへん＋非」、88-17］、あの、絵の※［＃「けものへん＋非」、88-18］々、それの

鼻、がまた高くて巨(おおき)いのが、黒雲のようにかぶさると思いましたばかり……何にも分らなくなりました。

あとで——息の返りましたのは、一軒家で飴(あめ)を売ります、お媼(ばあ)さんと、お爺さんの炉端でした。裏背戸口へ、どさりと音がしたきりだった、という事です。どんな形で、投(ほう)り出されていたんでしょう。」

棲を引合わせ、身をしめて、

「……のちに、大沼で、とれたといって、旅宿(やど)の台所に、白い雁(がん)が仰向(あおむ)けに、俎(まないた)の上に乗ったのを、ふと見まして、もう一度ゾッとすると、ひきつけて倒れました事さえあるんです。

——その晩は、お爺さんの内から、ほんの四五町の処を、俥（くるま）にのって帰ったのです。急に、ひどい悪寒がするといって、引被（ひっかぶ）って寝ましたきり、枕も顔もあげられますもんですか。悪寒どころですか、身体（からだ）はやけますようですのに、冷い汗を絞るんです。その汗が脇の下も、乳の処も、……ずくずく……悪臭い、鱶（ふか）だか、鮫（さめ）だかの、六月いきれに、すえたような臭（にお）いでしょう。むしりたい、切って取りたい、削りたい、身体中がむかむかして、しっきりなしに吐くんです。

無理やりに服（の）まされました、何の薬のせいですか、有る命は死にません。——活きているかいはなし……

ただ西明寺の観音様へお縋りにまいります。それだって、途中、牡丹のあるところを視ます時の心もちは、ただお察しにまかせます。……何の罪咎があるんでしょう、と思うのは、身勝手な、我身ばかりで、神様や仏様の目で、ごらんになったら。」

「お誓さん、……」

声を沈めて遮った。

「神、仏の目には、何の咎、何の罪もない。あなたのような人間を、かえって悪魔は狙うのですよ。幾年目かに朽ちた牡丹の花が咲いた……それは嘘ではありますまい。人は見て奇瑞とするが、魔が咲かせたかも知

れないんです。反対に、お誓さんが故郷へ帰った、その瑞兆が顕われたとして、しかも家の骨に地蔵尊を祭る奇特がある。功徳、恭養、善行、美事、その只中を狙うのが、悪魔の役です。どっちにしろ可恐しい、早くそこを通抜けよう。さ、あなたも目をつむって、観音様の前へおいでなさい。」

「――ある時、和尚さんが、お寺へ紅白の切を、何ほどか寄進をして欲しいものじゃ、とおっしゃるんです。寺の用でない、諸人の施行のためじゃけれど、この通りの貧乏寺。……ええ、私の方から、おやくに立ちますならお願い申したいほどですわ。三反持って参りま

すと、六尺ずつに切りたいが、鋏というものもなし……庖丁ではどうであろう。まあ、手で裂いても間に合いますわ。和尚さんに手伝って三方の上へ重ねました時、つい、それまでは不信心な、何にも知らずにおりました。子育ての慈愛をなさいます、五月帯のわけを聞きまして、時も時、折も折ですし、……観音様。」

お誓が、髪を長く、すっと立って、麓に白い手を合わせた。

「つい女気で、紅い切を上へ積んだものですから、真上のを、内証で、そっと、頂いたんです。」

「それは、めでたい。——結構ではないか、お誓さん。」

お誓は榎の根に、今度は吻（ほっ）として憩った、それと差（さし）むかいに、小県は、より低い処に腰を置いて、片足を前に、くつろぐ状（さま）して、

「節分の夜の事だ。対手（あいて）を鬼と思いたまえ。が、それも出放題過ぎるなら、怪我……病気だと思ったらどうです。怪我や病気は誰もする。……その怪我にも、病気にも障りがなくって、赤ちゃんが、御免なさいよ、ま、出来たとする。昔から偉人には奇蹟が携わる、日を見て、月を見て、星を見て、いや、ちと大道うらないに似て来たかね。」

袖を開いて扇を使った。柳の影が映りそうで、道得（いいえ）

て、いささか可（よし）と思ったらしい。
「鶴を視（み）て懐妊した験（げん）はいくらもある。いわゆる、もうし子だとお思いなさい。その上、面倒な口を利く父親なしに、お誓さん一人で育てたら、それが生一本の田沢家の血統じゃありませんか。そうだ、悪魔などと言ったのは、私のあやまり、豊年の何とかいう雪が降って、節分には、よく降るんです。正に春立（りっしゅん）ならんとする時、牡丹に雪の瑞（ずい）といい、地蔵菩薩の祥（しょう）といい、あなたは授（さずか）りものをしたんじゃないか、確（たしか）にそうだ、——お誓さん。」
お誓は淡（うす）くまた瞼（まぶた）を染めた。

「そんな、あの、大それた、高望みはしませんけれど、女の子かも知れないと思いました。五日、七日（なぬか）、二夜（ふたよ）、三夜、観音様の前に静（じっ）としていますうちに、そういえば、今時、天狗（てんぐ）も※々（ひひ）［＃「けものへん＋非」、91-16］も居まいし、第一獣（けもの）の臭気（におい）がしません。くされたというは心持で、何ですか、水に棲（す）むもののような気がするし、森の香の、時々峰からおろす松風と一所に通って来るのも、水神、山の神に魅入られたのかも分らない。ええ、因果と業。不具（かたわ）でも、虫でもいい。鳶鴉（とんびからす）でも、鮒（ふな）、鰌（どじょう）でも構わない。その子を連れて、勧進比丘尼（かんじんびくに）で、諸国を廻（めぐ）って親子の見世ものになった

らそれまで、どうなるものか。……そうすると、気が易くなりました。」

「ああ、観音の利益だなあ。」

つと顔を背けると、肩をそいで、お誓は、はらはらと涙を落した。

「その御利益を、小県さん、頂いてだけいればよかったんですけれど——早くから、関屋からこの辺かけて、鳥の学者、博士が居ます。」

「…………」

「鳥の巣に近づくため、撃つために、いろいろな……あんな形（なり）もする、こうもする。……頭に樹の枝をか

ぶったり、かずらや枯葉を腰へ巻いたり……何の気もなしに、孫八ッて……その飴屋の爺さんが夜話するのを、一言……」

（!…………）

「焼火箸を脇の下へ突貫（つきぬ）かれた気がしました。扇子（おうぎ）をむしって棄（す）ちょうとして、勿体ない、観音様に投げうちをするようなと、手が痺（しび）れて落したほどです。夜中に谷へ飛降りて、田沢の墓へ噛（か）みつこうか、とガチガチと歯が震える。……路傍（みちばた）のつぶれ屋を、石油を掛けて焼消そうか。牡丹の根へ毒を絞って、あの小川をのみ干そうか。

もうとても……大慈大悲に、腹帯をお守り下さいます、観音様の前には、口惜くって、もどかしくって居堪らなくなったんですもの。悪念、邪心に、肝も魂も飛上って……あら神様で、祟の鋭い、明神様に、一昨日と、昨日、今日……」

――誓ただひとりこの御堂に――

「独り居れば、ひとり居るほど、血が動き、肉が震えて、つきます息も、千本の針で身体中さすようです。――前刻も前刻、絵馬の中に、白い女の裸身を仰向けにくくりつけ、膨れた腹を裂いています、安達ヶ原の孤家の、もの凄いのを見ますとね。」

（――実は、その絵馬は違っていた――）

「ああ、さぞ、せいせいするだろう。あの女は羨しいと思いますと、お腹の裡で、動くのが、動くばかりでなくなって、もそもそと這うような、ものをいうような、ぐっぐっ、と巨きな鼻が息をするような、その鼻が舐めるような、舌を出すような、蒼黄色い顔――畜生――牡丹の根で気絶して、生死も知らないでいたうちの事が現に顕われて、お腹の中で、土蜘蛛が黒い手を拡げるように動くんですもの。

帯を解いて、投げました。

ええ、男に許したのではない。

自分の腹を露出したんです。芬と、麝香の薫のする、金襴の袋を解いて、長刀を、この乳の下へ、平当てにヒヤリと、また芬と、丁子の香がしましたのです。」……

この薙刀を、もとのなげしに納める時は、二人がかりで、それはいいが、お誓が刃の方を支えたのだから、おかしい。

誰も、ここで、薙刀で腹を切ったり、切らせたりするとは思うまい。

――しかも、これを取はずしたという時に落したの

であろう。女の長い切髪の、いつ納めたか、元結（もとゆい）を掛けて黒い水引でしめたのが落ちていた。見てさえ気味の悪いのを、静（しずか）に掛直した。お誓は偉い！……落着いている。

そのかわり、気の静まった女に返ると、身だしなみをするのに、ちょっと手間が取れた。

下じめ――腰帯から、解いて、しめ直しはじめたのである。床へ坐って……

ちっと擽（くすぐ）ったいばかり。こういう時の男の起居挙動（たちいふるまい）は、漫画でないと、容易にその範容が見当らない。小県は一つ一つ絵馬を視（み）ていた。薙刀の、それ

からはじめて。――

一度横目を流したが、その時は、投げた単衣（ひとえ）の後棲（うしろづま）を、かなぐり取った花野の帯の輪で守護して、その秋草の、幻に夕映ゆる、蹴出（けだ）しの色の片膝を立て、それによりかかるように脛（はぎ）をあらわに、おくれ毛を撫（な）でつけるのに、指のさきをなめるのを、ふと見まじいものを見たように、目を外らした。

「その絵馬なんですわ、小県さん。」

起（た）つと、坐ると、しかも背中合せでも、狭い堂の中の一つ処で、気勢（けはい）は通ずる。安達ヶ原の……

「お誓さん、気のせいだ。この絵馬は、俎（まないた）の上へ―

——裸体（はだか）の恋絹を縛ったのではない。白鷺を一羽仰向けにしてあるんだよ。しかもだね、料理をするのは、もの凄（すご）い鬼婆々（おにばばぁ）じゃなくって、鮹（たこ）の口を尖（とが）らした、とぼけた爺さん。笑わせるな、これは願事（ねがいごと）でなくて、殺生をしない戒めの絵馬らしい。」

事情（ことがら）も解（よ）めている。半ば上の空でいううちに、小県のまた視（なが）めていたのは、その次の絵馬で。

はげて、くすんだ、泥絵具で一刷毛（ひとはけ）なすりつけた、波の線が太いから、海を被（かつ）いだには違いない。……鮹かと思うと脚が見えぬ、鰈（かれい）、比目魚（ひらめ）には、どんよりと色が赤い。赤鱏（あかえい）だ。が何を意味する？……つかわしめ

だと聞く白鷺を引立たせる、待女郎（まちじょろう）の意味の奉納か。その待女郎の目が、一つ、黄色に照って、縦にきらきらと天井の暗さに光る、と見つつ、且つその俎の女の正体をお誓に言うのに、一度、気を取られて、見直した時、ふと、もうその目の玉の縦に切れたのが消えていた。

　斑蝥（はんみょう）だ。斑蝥が留っていた。

「お誓さん、お誓さん。——その辺に、綺麗（きれい）な虫が一つ居はしませんか、虫が。」

「ええ。」

「居る？」

「ええ。居ますわ。」

バタリと口に啣(くわ)えた櫛(くし)が落ちた。お誓は帯のむすびめをうしろに取って、細い腰をしめさまに、その引掛(ひっか)けを手繰っていたが、

「玉虫でしょう、綺麗な。ええ、人間は、女は浅間しい。すぐに死なないと思いましたら、簪(かんざし)も衣(き)ものも欲(ほし)いんです。この場所ですから、姫神様が下さるんだと思いましてさ、ちょっと、櫛でおさえました。ツイとそれて、取損って、見えませんわ。そちらに居ません？　玉虫でしょう。」

筐(かたみ)の簪、簞笥(たんす)の衣(きぬ)、薙刀で割く腹より、小県はこの

時、涙ぐんだ。
いや、懸念に堪えない。
「玉虫どころか……」
名は知るまいと思うばかり、その説明の暇もない。
「大変な毒虫だよ。——支度はいいね、お誓さん、お堂の下へおりて下さい。さあ……その櫛……指を、唇へ触りはしまいね。」
「櫛は峰の方を啣えました。でも、指はあの、鬢の毛を撫でつけます時、水がなかったもんですから、つい……いいえ、毒にあたれば、神様のおぼしめしです。こんな身体を、構わんですわ。」

ちょっとなまって、甘えるような口ぶりが、なお、きっぱりと断念（あきらめ）がよく聞えた。いやが上に、それも可哀（あわれ）で、その、いじらしさ。

「帯にも、袖にも、どこにも、居ないかね。」

再び巨榎（おおえのき）の翠（みどり）の蔭に透通る、寂しく澄んだ姿を視（み）た。

水にも、満つる時ありや、樹の根の清水はあふれたり。

「ああ、さっき水を飲んだ時でなくて可（よ）かった。」

引立てて階（きざはし）を下りた、その蔀格子（しとみごうし）の暗い処に、カタリと音がした。

「あれ、薙刀がはずれましたか。」
清水の面（おもて）が、柄杓（ひしゃく）の苔（こけ）を、琅玕（ろうかん）のごとく、梢（こずえ）もる透間（すきま）を、銀象嵌（ぎんぞうがん）に鏤（ちりば）めつつ、そのもの音の響きに揺れた。
「まあ、あれ、あれ、ご覧なさいまし、長刀が空を飛んで行く。」……
榎の梢を、兎のような雲にのって。
「桃色の三日月様のように。」
と言った。
松島の沿道の、雨晴れの雲を豆府に、陽炎（かげろう）を油揚に見物したという、外道俳人、小県の目にも、これを仰

いだ目に疑いはない。薙刀の鋭(と)き刃のように、たとえば片鎌の月のように、銀光を帯び、水紅(とき)の羅(うすもの)して、あま翔(かけ)る鳥の翼を見よ。

「大沼の方へ飛びました。明神様の導きです。あすこへ行きます、行って……」

「行って、どうします？　行って。」

「もうこんな気になりましては、腹の子をお守り遊ばす、観音様の腹帯を、肌につけてはいられません。解きます処、棄てます処、流す処がなかったのです。女の肌につけたものが一度は人目に触れるんですもの。抽斗(ひきだし)にしまって封をすれば、仏様の情(なさけ)を仇(あだ)の女の邪

念で、蛇、蛭(ひる)に、のびちぢみ、ちぎれて、蜘蛛(くも)になるかも知れない。やり場がなかったんですのに、導びきと一所に、お諭(さと)しなんです。小県さん。あの沼は、真中(まんなか)が渦を巻いて底知れず水を巻込むんですって、爺さんに聞いています……」

と、銑吉の袂(たもと)の端を確(しか)と取った。

「行(ゆ)く道が分っていますか。」

「ええ、身を投げようと、……二度も、三度も。」——

欄干の折れた西の縁の出端(はずれ)から、袖形に地の靡(なび)く、向うの末の、雑樹(ぞうき)茂り、葎蔽(むぐらおお)い、ほとんど国を一重隔てた昔話の音せぬ滝のようなのを、猶予(ため)らわず潜(くぐ)る時

から、お誓が先に立った。おもいのほか、外は細い路が畝（うね）って通った。が、小県はほとんど山姫に半ばを誘わるる思いがした。ことさらにあとへ退（さが）ったのではない、もう二三尺と思いつつ、お誓の、草がくれに、いつもその半身、縞絹（しまぎぬ）に黒髪した遁水（にげみず）のごとき姿を追ったからである。

沼は、不忍（しのばず）の池を、その半（なかば）にしたと思えば可（い）い。ただ周囲に蓊鬱（おううつ）として、樹が茂って暗い。

森をくぐって、青い姿見が蘆間（あしま）に映った時である。汀（なぎさ）の、斜向（はすむこ）うへ——巨（おおき）な赤い蛇が顕（あら）われた。蘆萓（かや）を引伏せて、鎌首を挙げたのは、真赤（まっか）なヘルメット帽

である。

小県が追縋(おいすが)る隙(すき)もなかった。

衝(つ)と行(ゆ)く、お誓が、心せいたか、樹と樹の幹にちょっと支えられたようだったが、そのまま両手で裂くように、水に襟を開いた。玉なめらかに、きめ細かに、白妙(しろたえ)なる、乳首の深秘は、幽(かすか)に雪間の菫(すみれ)を装い、牡丹冷やかにくずれたのは、その腹帯の結びめを、伏目に一目、きりきりと解きかけつつ、

「畜生……」

と云った、女の声とともに、谺(こだま)が冴えて、銃が響いた。

小県は草に、伏(ふせ)の構(かまえ)を取った。これは西洋において、いやこの頃は、もっと近くで行(や)るかも知れない……爪さきに接吻(キス)をしようとしたのではない。ものいう間(ま)もなし、お誓を引倒して、危難を避けさせようとして、且つ及ばなかったのである。

その草伏(くさぶし)の小県の目に、お誓の姿が――峰を抽(ぬ)いて、高く、金色(こんじき)の夕日に聳(そばだ)って見えた。斉(ひと)しく、野の燃ゆるがごとく煙って、鼻の尖(とが)った、巨(おおい)なる紳士が、銃を倒す、と斉しく、ヘルメット帽を脱いで、高くポンと空へ投げて、拾って、また投げて、落ちると、宙に受けて、また投(なげ)るのを視た。足でなく、頭で雀躍(こおどり)したの

である。たちまち、法衣を脱ぎ、手早く靴を投ると、勢よく沼へ入った。

続いて、赤少年が三人泳ぎ出した。中心へ近づくままに、掻く手の肱の上へ顕われた鼻の、黄色に青みを帯び、茸のくさりかかったような面を視た。水に拙いのであろう。喘ぐ――しかむ、泡を噴く。が、あるいは鳥に対する隠形の一術であろうも計られぬ。

「ばか。」

投棄てるようにいうとともに、お誓はよろよろと倒れて、うっとりと目を閉じた。

早く解いて流した紅(くれない)の腹帯は、二重三重にわがなって、大輪の花のようなのを、もろ翼(は)を添えて、白鷺が、すれすれに水を切って、鳥旦那の来(きた)り迫る波がしらと直線に、水脚を切って行(ゆ)く。その、花片(はなびら)に、いやその腹帯の端に、キラキラと、虫が居て、青く光った。

　鼻を仰向け、諸手(もろて)で、腹帯を摑(つか)むと、紳士は、ずぶずぶと沼に潜った。次に浮きざまに飜(ひるがえ)った帯は、翼かと思う波を立てて消え、紳士も沈んだ。三個の赤い少年も、もう影もない。

　ただ一人、水に入ろうとする、ずんぐりものの色の

黒い少年を、その諸足を取って、孫八爺（じい）が押えたのが見える。押えられて、手を突込（つっこ）んだから、脚をばったのように、いや、ずんぐりだから、蟋蟀（こおろぎ）のように掙（もが）いて、頭で臼（うす）を搗（つ）いていた。

「――そろそろと歩行（ある）いて行（ゆ）き、ただ一番あとのものを助けるよう――」

途中から女の子に呼戻させておいて、嫗巫女（うばみこ）、その孫八爺さんに命ずるがごとくに云って――方角を教えた。

ずんぐりが一番あとだったのを、孫八が来て見出し

たとともに、助けたのである。
この少年は、少なからぬ便宜を与えた。——検（しらべ）する官人の前で、
「——三日以来、大沼が、日に三度ずつ、水の色が真赤（まっか）になる情報があったであります。緋（ひ）の鳥が一羽ずつ来るのだと鳥博士が申されました。奇鳥で、非常な価値である。十分に準備を整えて出向ったであります。果して、対岸に真紅（まっか）な鳥が居る。撃ったであります。銃の命中したその鳥は、沼の中心へ落ちたであります。従って高級なる猟犬として泳いだのであります。」
と明確に言った。

のみならず、紳士の舌には、斑蝥がねばりついていた。

一人として事件に煩わされたものはない。汀（なぎさ）で、お誓を抱いた時、惜しや、かわいそうに、もういけないと思った。胸に硝薬（しょうやく）のにおいがしたからである。

水を汲（く）もうとする処へ、少年を促がしつつ、廻り駈（が）けに駈けつけた孫八が慌（あわただ）しく留めた。水を飲んじゃなりましねえ。山野に馴れた爺の目には、沼の水を見さっせえ、お前等（めえら）がいった、毒虫が、ポカリポカリ浮いてるだ。……

明神まで引返す、これにも少年が用立った。爺さんにかわって、お誓を背にして走った。

清水につくと、魑魅が枝を下り、茂りの中から顕われたように見えたが、早く尾根づたいして、八十路に近い、脊の低い柔和なお媼さんが、片手に幣結える榊を持ち、杖はついたが、健に来合わせて、

「苦労さしゃったの。もうよし、よし。」

と、お誓のそのふくよかな腹を、袖の下で擦って微笑んだ。そこがちょうど結び目の帯留の金具を射て、弾丸は外れたらしい。小指のさきほどの打身があった。淡いふすぼりが、媼の手が榊を清水にひたして冷すう

ちに、ブライツッケルの冷罨法（れいあんぽう）にも合（かな）えるごとく、やや青く、薄紫にあせるとともに、乳（ち）が銀の露に汗ばんで、濡色の睫毛（まつげ）が生きた。

町へ急ぐようにと云って、媼はなおあとへ残るから、

「お前様は？」

お誓が聞くと、

「姫神様がの、お冠の纓（ひも）が解けた、と御意じゃよ。」

これを聞いて、活ける女神（じょしん）が、なぜみずからのその手にて、などというものは、烏帽子折（えぼしおり）を思わるるがいい。早い処は、さようなお方は、恋人に羽織をきせら

れなかろう。袴腰も、御自分で当て、帽子も、御自分で取っておかぶりなさい。

五

神巫たちは、数々、顕霊を示し、幽冥を通じて、俗人を驚かし、郷土に一種の権力をさえ把持すること、今も昔に、そんなにかわりなく、奥羽地方は、特に多い、と聞く。

むかし、秋田何代かの太守が郊外に逍遥した。小やすみの庄屋が、殿様の歌人なのを知って、家に持伝

えた人麿の木像を献じた。お覚えのめでたさ、その御機嫌の段いうまでもない――帰途に、身が領分に口寄(くちよせ)の巫女(いちこ)があると聞く、いまだ試みた事がない。それへ案内(あない)をせよ。太守は人麿の声を聞こうとしたのである。

しのびで、裏町の軒へ寄ると、破屋(あばらや)を包む霧寒く、松韻颯々(さつさつ)として、白衣(びゃくえ)の巫女が口ずさんだ。

「ほのぼのと……」

太守は門口(かどぐち)を衝(つ)と引いた。「これよ。」「ははッ。」「巫女に謝儀をとらせい。……あの輩(やから)の教化は、士分にまで及ぶであろうか。」「泣きみ、笑いみ……ははッ、

ただ婦女子のもてあそびものにござりまする。」「さようか――その儀ならば、」……仔細（しさい）ない。

が、孫八の嫗（うば）は、その秋田辺のいわゆる（おかみん）ではない。越後路（えちごじ）から流漂（るひょう）した、その頃は色白な年増であった。呼込んだ孫八が、九郎判官は恐れ多い。弁慶が、ちょうはん、熊坂ではなく、賽（さい）の目の口でも寄せようとしたのであろう。が、その女振（ぶり）を視（み）て、口説（くど）いて、口を遁（に）げられたやけ腹に、巫女の命とする秘密の箱を攫（さら）って我が家を遁げて帰らない。この奇略は、モスコオの退都に似ている。悪孫八が勝ち、無理が通った。それも縁であろう。越後巫女（みこ）は、水飴（みずあめ）と荒物

を売り、軒に草鞋(わらじ)を釣(つる)して、ここに姥塚(うばづか)を築くばかり、あとを留(とど)めたのであると聞く。

――前略、当寺檀那、孫八どのより申上げ候。入院中流産なされ候御婦人は、いまは大方に快癒(かいゆ)、鬱散(うっさん)のそとあるきも出来候との事、御安心下され度(たく)候趣、さて、ここに一昨夕、大夕立これあり、孫八老、其(そ)の砌(みぎり)某所墓地近くを通りかかり候折から、天地晦冥(かいめい)、雹(ひょう)の降ること凄(すさ)まじく、且(かつ)は電光の中(うち)に、清げなる婦人一人(にん)、同所、鳥博士の新墓の前に彳(たたず)み候が、冷く莞爾(にっこり)といたし候とともに、手の壺微塵(みじん)に砕け、一塊の鮮血、

あら土にしぶき流れ、降積りたる雹を染め候が、赤き霜柱の如く、暫時（しばし）は消えもやらず有之（これあり）候よし、貧道など口にいたし候もいかが、相頼まれ申候ことづてのみ、いずれ仏菩薩の思召す処にはこれあるまじく、奇（く）しく厳（いつく）しき明神の嚮導（きょうどう）指示のもとに、化鳥の類の所為（しょい）にもやと存じ候——

西明寺　木魚。

和尚さんも、貧地の癖に「木魚」などと洒（しゃ）落れている。が、それはとにかく——（上人の手紙は取意の事）

東京の小県へこの来書の趣は、婦人が受辱（じゅにく）、胎蔵（たいぞう）の玻璃（はり）を粉砕して、汚血（おけつ）を猟色の墳墓に、たたき返した

と思われぬでもない。

昭和八（一九三三）年一月

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房
　　1996（平成8）年6月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十三巻」岩波書店
　　1942（昭和17）年6月22日発行
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年3月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。